「あの日、家族のように」

【登場人物】

○大西　舞（３２）…親を失った被災者。

○近藤清子（きよこ）（７０）…娘を失った被災者。

○大西結花（ゆか）（０）…舞の娘。

○大西圭太（３２）…舞の夫。漁師。

【概要】

これはまるで家族の様な、他人同士の物語。

南海トラフ巨大地震発生直後の、徳島県のとある港町。震災で両親を失った舞（３２）は、行方不明の夫・圭太（３２）を探しながら、娘の結花（０）と避難所で暮らす日々を送っていた。

そんな舞を放っておけず、清子（７０）は、倒壊を免れた自分の家で一緒に暮らすことを提案する。実は清子も、大切な娘を津波で亡くしていたのだ。

突如始まった共同生活の中で、舞、結花、清子の三人は、次第に本当の家族の様になっていく…。

互いの痛みを理解し合いながら、それでも必死に生きる被災者たちの姿を描いた物語。

※清子の台詞は標準語で記載していますが、
すべて阿波弁（徳島弁）の想定です。

ＳＥ　穏やかな波の音。海鳥の声。
玄関の扉が開く。

舞　「（戸惑いながら）お邪魔します…」
清子「舞さん、『ただいま』でいいわよ」
舞　「でも…」
結花「（無邪気に笑う）」
清子「ほら、結花ちゃんは喜んでる」
舞　「清子さん私…何てお礼言ったらいいか」
清子「いいのよ。こんな状況だもの。私のことは、家族と思ってくれていいから」
舞　「…ありがとうございます」
舞Ｍ「知り合ったばかりの清子さんと、今日からこの家で暮らすことになった」

ＳＥ　避難のサイレンとアナウンス、
住民たちの避難の声が町に響く。

舞M「あの日、私は娘の結花を抱えて何とか
逃げたけど…、両親も、私の家も…、
黒い波に奪われた…」

SE　地響き。避難民たちの悲鳴

舞M「それからは避難所で余震に怯える毎日。
連絡手段はないのに、犠牲者の知らせ
が絶えず聞こえて…正直限界だった…」

結花「（泣きわめく）」

舞　「（あやして）よしよし…結花泣かない
の…大丈夫だから」

清子「（来て）こんな所じゃ冷えるでしょ
う？中に入ったら？」

舞　「あ…いえ…、中だと、その…泣き声が
うるさくて、怒る方もいて…」

清子「（ため息）…あなた、家族は？」

舞　「この子と…、どこかに夫がいます…」

清子「そう…。帰る場所はあるの？」

舞　「…いえ」

清子「…なら…うちにいらっしゃい」

舞　「（驚き）…え？」

結花「（だんだん泣き止む）」

舞M「それが、清子さんとの出会い。避難所にいた清子さんは、損壊を免れた自宅に戻るつもりだったらしい」

SE　散乱した家財を片付ける

清子「（片付けながら）家が無事でも、こんなにモノが倒れてちゃ暮らせないから。舞さんが来てくれて助かったわ」

舞　「（片付けながら）そんな…助かってるのはこちらの方です」

清子「舞さんたちは、二階の部屋を使って。娘の部屋だから、着替えも多少はあると思う」

舞　「娘さん…？（手が止まる）」

清子「今はね…旅行に出かけてていないの」

舞　「そうだったんですか…。早く、連絡が繋がるようになるといいですね」

清子「……少し、空気入れ替えましょうか」

舞　「あ…私やります…！（歩き出す）」

清子「ありがとう」

ＳＥ　窓が開き、風が吹き込む

舞　「…」

清子「窓から見える景色も、うんと変わっちゃったわね…」

舞　「…」

清子「舞さん…？どうかしたの…？」

舞　「……瓦礫の中に……夫の船が見えるんです…」

清子「…え…？」

舞　「夫は漁師で…あの日は、海に出てて…。それでも無事を信じてたんですけど…」

ＳＥ　風が強く吹き込む

清子　「舞さん…」

舞　「（思わず涙が溢れ）…ごめんなさい」

舞M「泣きたいことは山ほどあったのに…、
今さら涙が出てきて…。気づけば私は、
清子さんの腕の中で泣いていた…」

SE　炊き出しに集う声

舞M「助け合う人が多い中で、足元を見る人
もいる。どこか他人事のような県外の
報道陣や、憤る地元の人たち…。それ
でも、私たちは懸命に生きた…」

SE　玄関の扉が開く

舞　「ただいま戻りました」

清子「舞さん、普通に『ただいま』って言え
ばいいのよ（笑）」

舞　「すみません…」

清子「そうだ、来週の日曜、地域の人との集会があるんだけど、参加してみない？」
舞　「集会…ですか？」
清子「気持ちが沈んで、孤立する人も多くてね。みんなで集まって話をして、少しでも心を丈夫にしましょうって会なの」
舞　「でも、私は…まだあまり、話す気になれなくて…」
清子「（微笑み）なら、何も話さなくていい」
舞　「…え？」
清子「いるだけでいいのよ。こんな状況だもの…。言葉がなくたって…お互いの痛みはわかるでしょう？」
舞　「…清子さんは…本当に凄いですね」
清子「ん？」
舞　「いつも周りのこと考えてる。私と結花に声をかけてくれた時もそうでした」
清子「私はそんな…立派な人間じゃないわよ」
舞　「そんなことないです」
清子「……舞さん私ね…私、舞さんに言って

ないことがあるの…」

舞　「…言ってないこと…？」

清子「旅行に出かけたはずの娘がね…、波にのまれるところを見たのよ…」

舞　「…」

清子「地震のせいで電車が止まって…歩いて戻ろうとしたんだろうね…。坂を登る娘が見えて…。でも、ちょうど津波が来たとき…あの子逃げ遅れた人の所に駆け寄ったのよ…。私ずっと受け入れられなくて…本当のこと話せなかった」

舞　「…そんな…ごめんなさい私の方こそ…」

清子「ううん…舞さんが謝ることじゃないのよ。…ただ叶うなら…、娘と代わってあげたい…。それがダメなら…今すぐ娘のところにいきたい…。けど娘がね…あの子が…私に生きることを望んでる気がするのよ。『お母さん人に優しくしなきゃダメよ』ってね…、言われてる気がして…。それで私は、舞さん

と結花ちゃんに声をかけた…。『家族だと思ってくれていい』なんて言葉は…私のただの願望だったのかもね…」

舞　「清子さん…」

清子「…でも舞さんと過ごして気づいた…。助け合うことは…残された人間にしかできないでしょう？」

舞M「清子さんは…、私の知らないところでずっと苦しんでた。震災は、どんなに優しい人にも牙を剥く…」

ＳＥ　鳥のさえずり

結花「（クーイング）」

舞　「おはよう結花。今日もいい天気だね…」

ＳＥ　駆け寄る足音

清子「（来て）舞さん！早く！早く来て！」

舞　「どうしたんですか？」

清子「…生きてるわよ！…旦那さん！」

舞　「え…」

ＳＥ　廊下を駆ける二人の足音

玄関の扉が開く

舞　「（立ち止まって）…圭太…」

圭太「舞……舞…！」

舞　「圭太！」

ＳＥ　駆け寄って抱き合う二人

圭太「（泣きながら）…よかった…生きてて

よかった…」

舞　「（泣きながら）うん…よかった…」

圭太「結花も無事か！？」

舞　「うん…！元気にしてるよ…！」

圭太「そっかぁ…」

舞　「圭太は？…海にいたんじゃないの？」

圭太「ちょうど港に戻ってて、みんなで逃げ

たんだ。でもどこ探しても舞も結花も
見つかんなくて…。そしたら、ここで
お世話になってるって聞いたから…」

清子「よかったねぇ舞さん！」

舞　「はい…！」

圭太「本当に…本当にありがとうございました…！」

清子「いいのよ…！ほら上がって！結花ちゃんに会ってあげて！」

圭太「はい…！」

ＳＥ　鳥のさえずり

結花「（笑う）」

圭太「頑張ったなぁ結花…うん……頑張った
頑張った…」

舞　「今まで、どこにいたの？」

圭太「車の中で避難してた。ボランティアの
人にも助けて貰って…ここに来たんだ」

舞　「そうだったんだ」

圭太「…ご両親のこと聞いたよ…。本当に…、大変だったなぁ…」

舞　「うん…」

圭太「…舞…落ち着いたら…、ここを出ないか？」

舞　「え…？」

圭太「親戚と連絡取れて、アパートと仕事先紹介してもらえたんだ。ガソリンさえあれば、車でここを出て、何とか暮らせると思う」

舞　「…でも…」

清子「舞さん、何迷ってるの？…二人には結花ちゃんがいる。…それに、ガソリンならウチの車に残ってるかもしれない」

舞　「でも、それじゃあ清子さんが」

清子「私は運転できないから。娘の車なの」

舞　「…清子さん…その…」

清子「ん？」

舞　「もし嫌じゃなければ…一緒に県外へ出ませんか？」

清子「…え？」

圭太「うん…住むスペースなら、何とかなると思います」

清子「気持ちは嬉しいけど…私はここにいるわ。この家には…思い出が詰まってるの…。離れたくないのよ（笑）」

舞　「でも…」

清子「私は大丈夫。だから舞さん、これからも…しっかり生きてね」

舞　「清子さん…」

ＳＥ　車のドアが閉まり発車する

舞Ｍ「出発の日、私たちを見送る清子さんの姿が小さくなって…、そのうちすぐに見えなくなった…」

ＳＥ　街の雑踏

舞Ｍ「それから数日が経ったけど、前に進ん

でいる気はしなかった…」

ＳＥ　窓を開ける。波の音。海鳥の声。

清子「（呟く）…やっぱり…年寄り一人じゃ寂しくてダメね…」

ＳＥ　玄関扉のノック音

清子「はい…（と歩き出す）」

ＳＥ　玄関を開ける

清子「舞さん…！」

舞　「（微笑み）今日、集会の日でしたよね」

清子「…何でここに…」

舞　「夫と話して、週末だけでもこっちに帰ることにしたんです…」

清子「どうして…そんな…」

舞　「信じたいんです…清子さんの言葉を。

助け合うことは、残された人間にしか
できないって…。それに清子さんのこ
と、家族だと思っていいんですよね？」

清子「……舞さん…」

舞　「清子さん、……ただいま」

清子「（微笑む）…おかえりなさい」

（終）